

活動へのご協力を、お願いいたします

皆さんの「自分にできることをできるだけ」が必要です

ボランティア活動へ参加

ホームページの **ご意見・お問合せ** に
メッセージをいただくか
直接電話にてお問合せ下さい

■ボランティアで参加！

- ・フリースペースIROHA（不登校の子ども達の居場所）で、遊んだり、子ども達に寄り添い、一緒に過ごすボランティア
- ・みやっこ食堂(こども&おとな食堂)の、調理や配膳のボランティア
- ・無料学習教室で学習サポートのボランティア ※2023年12月現在休止中

学生ボランティアも歓迎！



活動へのご寄付

法人へのご寄付は、税制優遇の対象となります

- 個人でご寄付された場合、寄付金額の最大約50%が減税になります
- 法人で寄付された場合、法人の損金算入限度額が拡大されます
- 相続した財産を寄付すると、その分は相続税が非課税になります

【寄付の種類】

- 賛助会員：毎年、年間3,000円の会費を払い応援する会員
- ご寄付(都度寄付)：ご自分が寄付したい金額を、したい時にするご寄付
- ご寄付(継続寄付)：毎月引き落としで、定期的にするご寄付(1,000円～)
- ご寄贈：お米など、消費期限の長い食材でするご寄付

お申込みはこちら

- 当法人ホームページ **ご寄付・賛助会員の受付** にて
<https://www.miyasapo.net/support/>

- 直接事務所へ
当法人事務所へ、お電話いただき(0798-81-5301)
平日(木曜を除く)のAM10:00~PM16:00にお越しください
住所：西宮市西田町6-4 夙川サンらいふ(阪急高架下)

ホームページ



寄付



みやさぽ通信



VOL. 10

2023年12月8日
<http://www.miyasapo.net>

認定NPO法人 みやっこサポート

〒662-0034 西宮市西田町 6-5

e-mail : kuma@miyasapo.net

TEL (0798)81-5301 FAX (0798)81-5302

ご挨拶

ぴよんぴよんと卯年も元気に活動しよう♥と始まった本年。

5月8日に新型コロナウイルスが「5類」となり徐々にマスクを外す人も増えるなか、パーティションなどの感染対策を行いながら5月20日にみやっこ食堂を再開。最初は黙食が身につき黙々とだまって食べていたこども達が、笑顔を取りもどしていきました。

定員いっぱいの状態が続く不登校のこども達の居場所『IROHA』は、昨年仲間意識が強くなってきたこども達が、皆で部屋や公園で元気に遊ぶ姿が増えました。そして、こども達一人ひとりの大きな成長を見るたびにスタッフ皆で大喜び。

このように、活動が充実し、情報サイトの構築もやっと進められるようになるなど大きな結果が出る一方で、助成金の申請が選考で落ちるなど、運営の面では非常に苦しい状況が続きました。

しかし、そんな危機的状況は、こども達が自分たちの居場所の事を真剣に考えるきっかけにもなりました。そして始めたこども会議で出たたくさんの意見を基に、こども達と企画運営する『IROHAブランド』（月に1回のカレー販売や商品開発、動画作成・配信の企画）を生み出すことができました。

助成金が落ちたことは残念でしたが、こども達と話し合いができるようになったこと、そしてご家族、スタッフ、ボランティア皆で力を合わせ一つになれたことは、今年の大きな収穫だったと思います。

とは言え、資金調達の対策が急がれ実施したクラウドファンディング等

のご寄付の応援がなければ、活動を続けることはできませんでした。

ここを必要とする方々のためにも、温かな応援をくださる皆様の気持ちに伝えるためにも、活動を諦めるわけにはいきません。これから法人として抜本的に運営を見直していきたいと思っております。

この度はそのような諸事情で、みやさぽ通信の発刊が遅れてしまい申しわけありませんでした。

しかし、コロナ禍でも止めなかったあゆみは止めません。これからも温かな応援を、どうぞよろしくお願いいたします。



このマークもこどもが考えました↑



YouTube



Facebook



『2023年度スタッフメンバー』

認定NPO法人みやっこサポート
理事長 中島 恵美

活動の報告

期間：2022（R4）年1月～12月

こども食堂は2022年5月20日に再開することができました。

子ども・子育て支援

～子どもの楽しい！を創る～

フリースペースIROHA

学校に行かない、行きたくない子ども達が仲間と楽しむ居場所！

活動：月・水曜日 9:00～15:30
共催：にしのみや子どもと学びネットワーク
人数：のべ767名参加
ボランティアのべ242名



IROHAらぼ

学校に行かない、行きたくない子ども達が好きなことや、興味があることを学ぶ！

活動：火曜日 10:30～12:00 13:00～14:30
人数：のべ146名参加
ボランティアのべ148名



相談支援

活動：月・水曜日
協力相談員：福原圭子 青木育子 (トコロくらぶ)
開催：28日
相談人数：13名



みやっこ食堂

2022年5月20日再開

子どもも大人も、皆と一緒に食べる地域の食堂！
皆の楽しい居場所！

■ランチ 活動：毎週月・火・水・金曜日
12:00～13:00
人数：のべ1,280名参加
■晩ご飯 活動：毎週金曜日 17:00～20:00
人数：のべ622名参加



みやっこ弁当

配達：火曜日 阪急より北
金曜日 南東部
共催：NPO 法人なごみ
数量：家庭数 35軒
のべ2,562個配布



無料学習教室

2/23～休止

子ども達が、楽しく勉強する居場所！

活動：水曜日 17:00～21:00
人数：のべ27名参加

フードパントリー

支援の必要な人に食材提供！
活動：第1火・水曜日・随時
共催：コープこうべ
フードバンク関西
実施：23日

交流支援

～地域の仲間・居場所・楽しみづくり～

金曜カフェ

65歳以上の方対象のカフェ！
絵画や歌などの教室や外出も楽しみました！

活動：毎週金曜日
参加：のべ245名



山登りクラブ

山登りの基礎から学んで、いろんな世代の人とおしゃべりしながら山登り！

講師：兼重 良三
参加：のべ28名



地域交流スペース

地域交流スペース『つどッテ西田公園前』は、コロナ感染防止のため休止しました。

TERAKOYA にほんご

日本に住んでいる外国人の方を対象に、日本語や日本の文化を学びながら交流！

講師：名谷有子、北村庸子、木谷久代
活動：第1・3土曜日
参加：のべ17名

聞きかじり西宮 『西宮の二大ショッピングモール』 西宮流 岡本 順子

今回から新しいコラムが始まります！「西宮のことは、西宮の生き字引に聞こう！」ということで西宮流（にしのみやスタイル）の岡本さん、どうぞよろしくお願いいたします。

理事長の中島恵美さんとのご縁で、このコーナーを書かせていただくことになりました。

「西宮流(にしのみやスタイル)」編集室から見てきた西宮を、この誌面でみなさまとご一緒させていただけるチャンス을いただきとても嬉しく思っています。



第一回目の話題は・・・

西宮の二大ショッピングモール

西宮でのショッピングモールといえば、阪急西宮ガーデンズとららぽーと甲子園でしょう。

大正から昭和にかけて、西宮には遊園地や温泉地、甲子園球場、果樹園などがあり、西宮七園と言われました。

また、ハイカラな神戸と伝統の大阪の間で西宮という街ができました。

そんな西宮にできた、二つの大きなショッピングモールは、それぞれが阪急西宮球場跡・阪神パーク跡にできたと言う、なんとも西宮らしい立地です。

どちらの旧施設も、西宮にとってはランドマークとなる施設でしたが、その歴史の痕跡は新しい施設の中にひっそりと残されています。

ここでは、その痕跡をお話しますので、ぜひ探検に行ってみてくださいね。

阪急西宮球場跡にできた 阪急西宮ガーデンズ

① 4階スカイガーデンの一角にあるホームベースのモニュメント：西宮球場のホームベースがあったその位置にあります。

その近くには、昔の西宮球場の写真もありますよ。

② 本館5階クリスタルガーデン：西宮球場の精巧なジオラマも展示されています。

ダイヤモンドクロスも表現されています。

- ③ ガーデنز別館側の駐車場入り口の横にある通路の奥の曲がり角のアメフトの記念碑：西宮球技場は、アメフトの聖地でもありました。1941年、初めて日本で行われたアメリカンフットボールの公式戦の場所がここでした。



2004年 OPEN!

阪神パーク跡にできた ららぽーと甲子園

- ① エントランスに並ぶ四角錐状のモニュメント：透明に見えるパネルには、ららぽーと甲子園の歴史が英語で綴られています。詳しくは、西宮流をご覧くださいね。



- ② 阪神パークにあった大きな木々：キザニアのエントランス横のクスノキのように、その場所に残されている大木もあります。イトーヨーカドー側の北側の『ららパーク』に移植された木々もあり、春には桜の下に親子連れの姿もあります。



街の中にひっそりと残る歴史を見つけるお散歩も楽しいですよー♪♪

『がん』は現在日本人の死因、男女ともに第1位。

一生のうちに2人に1人はがんに罹ると言われています。現在『がん』は、全ての人にとって身近な病気です。そこで万が一に備えてというと、『がん保険』と頭に浮かぶ方も多くいらっしゃると思います。今回ぜひみなさんに『がん保険』について知っておいていただきたいポイントを一部、ご紹介いたします。

●がん診断給付金

『がん』と診断確定されたときに受け取れる給付金です。

保険会社によってさまざまですが、100万円・200万円・300万円といった診断給付金が一時金として支払われます。

☆チェックポイント☆

①給付される回数は？

初めて『がん』と診断された1回のみ受け取れるタイプ？ それとも「1年に1回」や「2年に1回」といった複数回受け取れるタイプ？なのか。

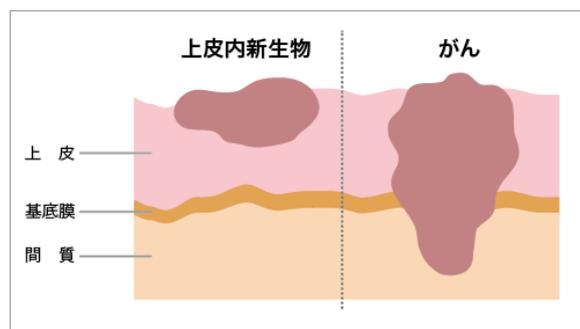


複数回受け取れるタイプだと、再発や転移が起きた場合や、治療が何年も続いた場合に備えることができるので安心です

②上皮内新生物でも給付されるのか？また保障金額は？

がんには「悪性新生物」と「上皮内新生物」があります。上皮内新生物とは、がん細胞が臓器の表面を覆っている上皮にとどまっている状態のもので、基本的には手術で取ることができ転移などはほとんどないと言われています。

上皮内新生物と診断された場合、「給付金は悪性新生物と同額保障」「悪性新生物の半額保障」「保障なし」のどの内容に該当するのか？



●抗がん剤治療保障

抗がん剤治療を受けた場合に、5万円や10万円などの給付金が月ごとに支払われます。

☆チェックポイント☆

①ホルモン療法も保障対象となっているか？



がんの部位や症状・進行度合いによってホルモン療法を使うこともありますので、ホルモン療法もカバーされていた方が安心です。

②支払回数は無制限？それとも回数制限あり？



抗がん剤治療がどのくらいの期間行われるのかは症状などによって変わってきますので、安心して投与するには無制限が安心です。

③この保障の保険期間は主契約と同じ終身？それとも10年ごとの定期型？



更新ごとに保険料がUPする心配もない終身の方が安心です。

今回ご紹介したポイントは一部です。以前のがん保険のように、日額〇〇〇〇円という保険から近年は今回ご紹介した、診断給付金をお支払いする保険が主流となっています。年々変わる保険情報をみなさまに、これから少しでもお伝えできればと思います。

今年度は助成金が受けられず厳しいスタートとなりましたが、逆境に負けず、『西宮をすべての人が暮らしやすいまちをつくる』というスローガンに相応しい、子ども達の置かれている環境を変えるための大きな一歩を踏み出すことができました。

■ こどもと未来を創るプロジェクト

『こどもと未来を創るプロジェクト』は、「こどもの声を聴くまちをつくる」ことを目標に、西宮のこどもや子育て支援に関わる団体で始めた協働プロジェクトで、今年は春と秋にイベントを開催しました。

- ▶ イベント『いま、「こどもの権利」を考える』開催！
「こどもたちにとっての優しいまち、必要な環境とは何か」について一緒に考える事を目的に、子どもの権利に関する条例をもとにつくられた川崎市子ども夢パークを題材にした映画『ゆめパの時間』の上映会と講演会、対談を実施。

日時：2023年5月7日 場所：西宮市勤労会館
スケジュール：13:00 オープニング

13:15～14:45 映画『ゆめパの時間』上映
15:00～15:30 講演会 西野博之さん
15:30～16:30 対談 西野さん×市長×代表中島

- ▶ イベント『こどもマルシェ』開催！～こどもが主役のマルシェ～
こども達が中心になって運営するいろいろなお店が出店しました。にしのみや若者応援 BANK の学生さんや、多くのボランティアさん、お客さんが集まり大賑わいのイベントになりました！

日時：2023年11月19日(日)10:00～14:00 場所：西田公園



りましょうと。そうならば、お互いWin-Winですよ。これは他の市町村のモデルになりました。

この地域課題調査は、その後の事業展開の基礎になりました。地域の課題が整理できているから解決のために必要な事業がわかるし、その事業を展開するために必要な助成金の申請にも説得力が増し、事業にお金もついてくる。

課題に沿って、「地域のがっこう」や「まちの見守り隊プロジェクト」、空き家を活用するプロジェクトなど、学生たちの力も借りながら、地域を巻き込んだ事業を拡げていきました。「地域のがっこう」は「まちのがっこう」に、「まちの見守り隊プロジェクト」から「まちのよろず屋」事業に、それぞれ発展しながら現在も実施しています。

【「まちのがっこう」を次への起爆剤に】

2023年4月、なごみの10周年に「まちのがっこう」を開校しました。

リアルとオンラインを併用して、年間約100の授業を定額で自由に学べるしくみです。「まちのがっこう」は起爆剤というか、さらなるチャンスと呼び込むための一つのチャレンジだと位置づけています。前述の「地域のがっこう」は2018年に開校し、2019年まで実施しました。住民が自分たちの町について学ぶ講座でした。なごみは鳴尾東地域の福祉計画に沿って事業をするのだから、学びの対象は鳴尾東地域だという固定概念があったんですね。でも地元だけで面白いことをするには限界があった。

今回の「まちのがっこう」はオンラインを併用していて、講師も生徒も全国から参加します。



鳴尾東を活性化するために、他地域の人たちが入ってきてもいいじゃないか。学びをもっと面白くしたら、外

から鳴尾東に人が入ってくるし、それが面白かったら地元の人も入ってくる。地元の若い人が入ってくれば、次のエネルギーが生まれる。

実際に「まちのがっこう」に入学している地元の40—50代には、福祉の人だけじゃない、ビジネスをしている人たちもいるんです。「まちのがっこう」をきっかけに、今までの福祉事業の感覚ではない、ビジネス感覚を持った人が担い手となって新しい事業を生み出すことにつながっていくのではないかと。お金を生み出すにはお金の流れを変えないといけないけど、どうしても同じ分野の中で考えていると頭打ちになってしまうんですね。考える人を変え、発想を変えないといけないと思っています。

これからは企業を定年した人や、企業そのものが地域の活性化に参画するようになってみて、地域と企業、常識の異なる2つをつなぐアドバイザーにもニーズがあると思っています。SDGs時代、人生100年時代に、企業や企業人が地域に入る方法を事例として作れば、ここ鳴尾東がそのモデルになることもできますよね。

【今、そして将来】

NPO法人「なごみ」設立から10年、当初やりたかったことはかなりできるようになったかなと思っています。

「くろーぱー」は子どもを対象に活動していたけど「なごみ」は多世代が対象なので、道を変えたようにも見える。だけど僕の中では変わってなくて、今は多世代の中に子どももいる形だと捉えています。たとえば今の事業、「まちのがっこう」でも、地域内の活動団体と一緒に月2回開催する

「鳴尾東ふぁみりーマルシェ」でも、住民どうしがお互いに助け合う「まちのよろず屋」でも、対象者を区



切っていないので、高齢者も子どももみな一緒にやれる。自然な形で多世代が集まって、お互い知り合える機会を作っていく、その中でお互いに学びあう、それがナチュラルな社会教育の形じゃないのかなと。

でも、終わった後子どもたちは、休み明けに自分たちの学校に行くことを楽しみに帰ったんですよ。それを見たとき、自分たちは学校を作ったつ



もりだったけど、結局子どもたちの日常生活の外に非日常体験の場を作ったのに過ぎないと気づきました。

いい3日間を作ることはできたけど、これは学校じゃないと。

でも、学校の外を変える、充実させることにも価値があるのではないかとも思いました。それが無いから今の学校はしんどいんじゃないかなと。僕がやりたいのは社会教育だと気付きました。

【就職せずNPO法人を設立】

廃校舎での活動が評判になり、甲東や段上、高木、東鳴尾などの小学校や青少年愛護協議会から、「うちの地域でもしてほしい」と依頼が来るようになりました。それに応えているうちに大学卒業の時期が来て、もう少しこの活動を続けて社会教育の意義を体現していきたいと思っていたので、就職はせず「くろーぱー」をNPO法人にし、大学生や社会人に声をかけて、キャンプなどの野外活動や仕事体験プログラムの企画提供の活動を始めました。

西宮に住み始めたのはこの時からです。上ヶ原に住んで、事務所兼住居で学生が大勢集まれる場所をつくって。「くろーぱー」の運営はお金にはならないし、いろんなノウハウを得る必要もあったので、イベント会社やキッズニアなどでアルバイトをして、企画や社会教育について学びつつ非日常体験プログラムの提供をしていました。

プログラムは結構よかったんですよ。コンビニで働く体験ができたり、ラジオパーソナリティや建築士の体験ができたり。でも、子どもが自分の好きなプログラムを選ぶから、西宮の子が芦屋に行ったり大阪に行ったりで、非日常体験の場所と日常の場所が離れていたのです。

僕は、近くのコンビニで職業体験して、日常に戻った時もまた行ってみようかなと思うような、生活圈の中に日常と非日常があるのが理想だと思っていたので、「どこかに根付かないと」と来たのが今の活動地域、鳴尾東でした。

【弱っている地域を元気に ~鳴尾東へ~】

鳴尾東を選んだのは相性がよかったからかな？人も温かかったし、鳴尾東から様々な福祉の活動が始まっていて、アンテナを立てている地域なんだと知った。西宮市の一番端にあるのである意味閉じられている面もあるけど、入ることができたらやろうとしていることが広がるんじゃないかという感覚がありました。

なので、当時の自治会長さんに「居場所をつくって多世代交流しながら、社会教育を地域に広げて地域を活性化したい」と話をしたんです。でも「無理、協力できない」って、2回お願いして2回断られました。理由は「つどい場では仕事にならない」「地域は今しんどい。新たなことをやろうとしても、そのエネルギーは地域にはない」の2つ。「じゃあここに引っ越してくる。仕事になるまで続ける。約束する。僕と地元の若者中心でやるから地域は見守ってほしい」とお願いし、「そのまま言うなら個人的に協力する」と言ってもらうことができました。

そこから会長さんには本当にお世話になりました。民生委員さんが持っている古い空き家を確保してくれて、金もないだろうから仕事になるまでは無償で使っていていいと話を付けてくれました。中に入ったら床がぶかぶかで、地元の企業さんに無償で改修を頼んでくれたり。そうして2013年、地域の多世代交流つどい場「和（なごみ）」がオープンしました。現在のNPO法人なごみの原点です。やろうとしていることを地域の方にきちんと見てもらいたかったので、つどい場運営の実行委員会「鳴尾東ふれあいまちづくりの会」を作り、そこに青少年愛護協議会の会長さんや地区協会の会長さんが個人で入ってくれました。

つどい場「和」は週2回開けていて、西宮の新鮮野菜を販売したりしていました。僕はつどい場の運営管理人をしていたのですが、“野菜を買いに来

たおばあさんがお金を持っていなくてどうしよう”とか、“学校の時間帯に子どもたちが来る、聞いたら学校に行っていない”とか、よくわからないことがいろいろ起こるんです。つどい場には、不登校の子も来るし、認知症の方や障害のある方も来る。居場所を必要としている人がこれだけいるということに、当時僕はまったく気づいていなかったんですね。

月2回の実行委員会では、そういったことをすべて報告しました。地域で起きている課題をつどい場が拾い上げていて、よくわかっていない若者がそれを報告するということが地域の課題会議になっていたんです。そうしたらこの実行委員会に人が集まるようになりました。市役所も来るし、福祉事務所、社会福祉協議会、包括支援センターも来るようになって、最終的には20人くらい集まるような場になったんです。

つどい場を始めて1年ほどたったころ、介護保険制度の改正に伴って市役所から、総合事業のモデルを鳴尾東で作ってもらえないかという打診を受けました。



実行委員会では受託ができないので、「委員会をNPO法人にしてカフェ型の交流拠点のモデル

をつくろう」と作ったのが、『NPO法人なごみ』と『まちcafé なごみ』です。

つどい場「和」は隠れ家的な一軒家で、古い中に温かさがあってよかったのですが、事業の受託には難しい環境だったので、それほど離れておらず周囲に飲食店がない今のエリアに2014年11月に移転しました。



「くろーばー」は「なごみ」に吸収合併しました。「くろーばー」は社会教育のためのNPOで、つどい場「和」を始めてからは社会教育が必要だと思いながらつどい場をやっていたわけですが、やっけていて気づいたのは、地域の

人の方が子どもに対して僕よりもずっと真剣に向き合っているということ。それなのに地域の社会教育力が弱まっていくのは、地域の力が弱まっているからだ。そんな中に、単発でエネルギーなものを乗せようとしてももっと疲弊するし、一時的なもので終わってしまう。先にすべきは、地域をもっと元気にすることではないか？地域をもっと元気にしたら、自然に社会教育はできるのではと気づいたんです。順番を変え、コミュニティを強くすることから始めようと舵を切り、NPO法人なごみをやると決めました。ここから活動領域が“地域福祉”に変わりました。



【モデル事業をつくる】

市から「なごみ」への委託の内容は、“ミニデイサービスの実施”と、“ヘルパーに代わる訪問型事業”の実施の2つでした。今後介護保険のサービス対象者が増えるので、要介護度の低い人になるべくデイサービスに行かなくてよいように、地域の中で予防できる事業をとというのがミニデイサービス。ヘルパーじゃなくてもできるような家事支援などをプログラム化してほしいというのが訪問型事業。制度が変わり市町村ごとに事業を決めなさいとなったので、西宮市の制度を設計するためのモデル事業でした。

そうやって福祉の専門分野の事業設計を急にやることになったけど、大学で福祉を学んだとはいえ簡単にはできません。手探り状態の中、まずカフェに人が集まる場をつくって、介護保険の該当者が来始めたら介護予防の体操をして、参加した対象者の人数分の補助金が出る仕組みを、2015年8月から試験実施しました。

最初にイメージしたのは、普通のカフェ営業の横でミニデイサービスをしている状態でしたが、全然うまくいかなかったですね。というのは、カフェとデイ、同じ空間の中に見えない壁をつくるわけですよ。普段はカフェ、金曜日はその半分でデイをやる。デイを利用できるのは介護保険で判定された該当者だけ。こちらでもデイを成功させたいから楽しそうにワイワイやるけど、該当しない人

はわいわいの中に入れない。疎外感から結局カフェに人が来なくなり、金曜日は全部がデイになりました。で、「どうやったらデイに入れるの？」って聞かれるので、介護保険のチェックリストに回答して該当したら入れますよって答えるんですが、これおかしいよね？って思ったんです。介護保険を使わないようにするためのモデル事業なのに介護保険を使う人を増やしていることになるんですよ。だったら、誰でも来ていいカフェで体操やレクレーションをした方がずっといい。うちがそう言って、西宮市も気づいて「じゃあデイはいい。ここはだれでも来ていいカフェにしてください」と方向転換し、11月にはミニデイの試験実施を終了。交流拠点事業にいち早く舵を切りました。今市内に交流拠点は7か所あって、その最初の拠点が『まちcafé なごみ』です。



当時僕はまったくの素人だったので、モデル事業受託の際に、月に2回絶対になごみに来てミーティングしてほしいって市にお願いしたんです。なので、社協と行政と地域包括が必ず毎月2回ここに来て実行委員会議をしていました。今考えると、社協と行政と包括が月2回民間のところに来るなんて普通じゃないですよ。でも必ず来てもらって、その場で僕が気づいたこと、おかしいと思ったことを報告して、「人が来なくなってます。やっぱりおかしいです」って現場も見てもらって、今の西宮市の交流拠点事業制度ができました。他にも、たとえば交流拠点の補助金の制度を作る際に、カフェの売上が増えた分補助金が減額され

ない仕組みを交渉しました。頑張った分補助金が減る制度だと、頑張らなくなるじゃないですか。だから頑張った分はちゃんと地域の成長につながる制度にしたかったんです。補助金は数年で切られたりしないし、かつ人件費も出せる。多分他の自治体にはない、西宮市の独自の、現場に即した制度を作ることができました。



【戦略的に地域に入る、根付く】

地域づくりのプレイヤーを見ていると、単発的に活性化する事業をする人は結構いる。でも、ひとつの地域に根付いて自治会づくりからやっている人って少ないんです。時間がかかるし、成果は見えにくいし、大変だから。でも、誰もやっていないからこそ、僕はこれをやろうと思った。始めてみて、地域に入るところで皆つますくんだと気づきました。だから僕は、地域の人を巻き込むことを戦略的にやろうと思ったんです。まずNPO なごみの定款を「鳴尾東地域の地区福祉計画に沿った事業をするNPOです」と変えました。だからなごみは、それ以外の事業はできないNPOなんです。地域密着型、地域運営型を掲げたことで動きづらくなる面はあったけど、地域での信頼を確保することを優先しました。その結果、2、3年かかりましたが、地域4つの町の自治会がなごみの賛助会員になりました。賛助会費を得るのが目的ではなく、地域と連動しているNPOだという証明を得るためです。そうなるためには、地域の既存事業を邪魔することなく共存することが重要ですよ。2016年に一年かけて、大学の社会学部のゼミ生と一緒に地域を歩きまわってヒアリングし、地域のニーズ・課題の調査をしました。その結果を元に、この課題解決のための事業はできますか？できるなら〇〇団体さんお願いします！と分担していきました。すると、ほとんどの既存団体はできなかつたんです、エネルギーがないと…。じゃあこれらの課題は、NPO 法人なごみが事業としてや